

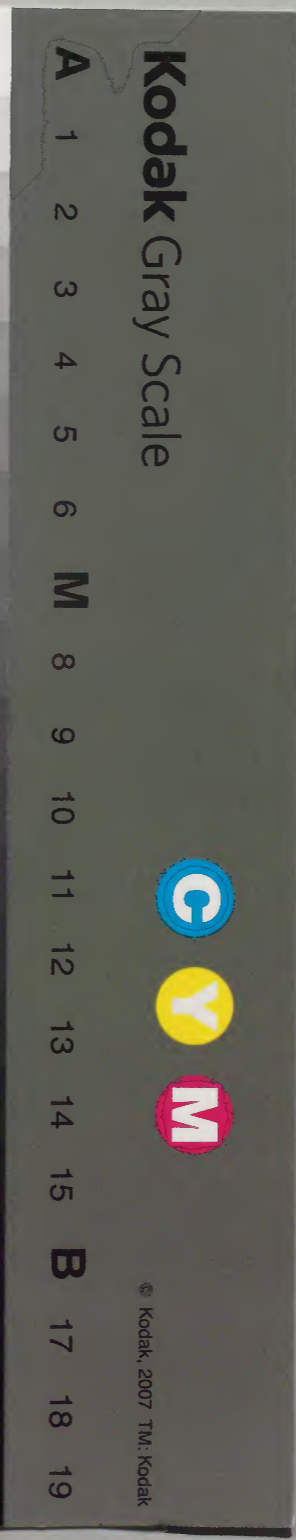
# 論語

三

和書門類			
二	四	五	三
一	〇	三	六
册	架	函	號

內閣文庫		
九	二	和
函	〇	書
一	〇	類
三	〇	架
架	册	號

內閣文庫	
番號	和 24535
冊數	10 ( 4 )
函號	191 131





淺草文庫

論語朱熹集註

雍也第六

溪世尊譯

子曰雍也可使南面

雍ハ仲弓の御名也。南面ハ南面して坐す。南面ハ天子の御名也。南面ハ天子の御名也。

真中。向陽徳盛。の時に上る。方ハ正。南へ面して坐す。の君の於へ拜し。北面の武

士ハ王位。今仲弓の人品を稱す。のひ実よ

仲弓問子桑伯子子曰可也簡

仲弓も聖人の我に南面を許す。の故に子桑が事と序

簡ハ心も簡にしてや。可と仰なり。簡ハ身と妄も動も

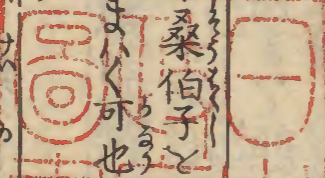
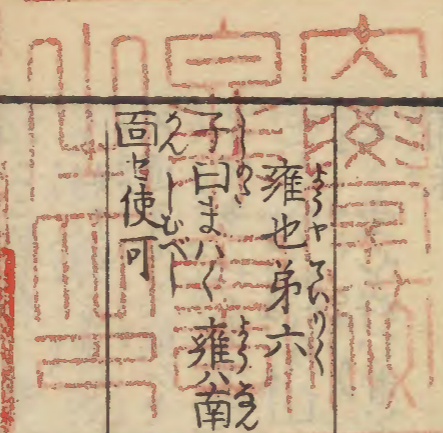
仲弓曰居敬而行簡以臨其民不亦可

心安く言ひて。尊大の風儀なり。可ハ大概によ

雍也第六  
子曰雍也可使南面

仲弓子桑伯子  
問子曰可也簡

仲弓曰居敬而行簡以臨其民不亦可





乎。居簡而行簡。無乃大簡乎。

居て簡を行ふ。乃ら大簡なること無乎。

仲弓見識をのべりて上りて立人ハ敬を重んずるべし。身を敬めば行はるるを乱さず。其敬の場は居て簡の道を行はば。万民の上りて臨み堪ふ。亦可なり。若し始より簡の場小居て物を簡するに。大り簡し過

然。哀公問弟子孰を好むと為孔子對て曰まはく顏

子對て曰まはく顏。○哀公問弟子孰為好學孔子對曰有顏回者有て學を好む怒を遷さ

不。不幸短命にして死。今ハ則ち亡未

幸短命死矣。今也則亡未聞好學者也。魯の君哀公の問はく。御門弟の中より孰人か尤も學を好むか。御答。顏淵一人をさす。その人の怒むべき事小

聞未。未だ學を好む者未

就て怒とらんと。此方の心。怒とらんと更よ。子禹王ハ大徳有バ。舜帝。餘が不仁の罪を誅し。その子禹王ハ大徳有バ

子華齊小使を冉子其母の為に粟を請

とて位を讓りて。如と思はる。扱せり。其の事。あまバ再びその萌しをあらはし。然るに天運薄く。して三十二歳して死矣。今ハ已に亡く。與顏淵死して後。真より學を好む者。いかに之を聞不との仰之。聖人の御門人。誰れ學を疎かる。人ヤ。然るに一人を指し。はあ。心有と多。

○子華使於齊冉子為其母請粟。

子曰まはく之に金と與。益を請曰まはく之は庾を與。冉子之に粟五秉を與。

子曰。まはく之に金と與。益を請。曰。まはく之は庾を與。冉子之に粟五秉を與。

子曰。與之金。請益。曰。與之庾。冉子與之粟五秉。

依て又一庾を命り。十六斗なり。然るに。冉子物好む。人より。遂に五秉をあらはし。とらる。五秉ハ九十斛なり。



子曰はく赤之  
乘月適肥馬に乗  
輕裘と衣と吾  
之を聞て君子ハ  
急周縁富に  
繼不

原思之が宰と為  
之粟九百と與  
辭

子曰はく母  
以て再が鄰里郷  
黨と與人乎

子仲弓と謂て曰  
まはく犁牛之子  
驛して且角ありハ  
用ると勿くと欲と  
雖も山川其諸と  
舎や

回ハ其心三月仁  
違不其餘ハ則ち  
日月に至る  
馬而矣助字

聖人ハ只子華が奢たるを禁めまて貧を人ハ第一の  
めぐみ救へば富は富なる者ハ法の外益たる事を示し  
子曰赤之適齊也乘肥馬衣輕裘吾聞  
之也君子周急不繼富  
赤ハ子華の名  
吾子華が齊へ行  
体を見よに奢んで肥馬に乗奢たる者ハ周  
衣服を着る吾兼て聞傳ハハ人の困窮急者ハ周  
施一富る身分の上の繼與るものも今子華が如  
富る者ハ定まりし事を以て富る者ハ富るを  
越て與べし今五秉を以て與へし原思爲之宰與之  
私とらる者ハ曾て益なり

粟九百辭  
御門人原思ハ操行正し  
聖人曾の攝政なり  
時下宰とあり

子曰母以與爾鄰里郷黨乎  
母とハ原思の辭退し  
取むんバ之を再住  
隣ハ五家里ハ二十五家郷ハ万二千五百家黨ハ五百家也

○子曰仲弓曰犁牛之子驛且角雖欲  
勿用山川其舎諸  
子ハ賢徳世に用ふるに足たるとハ當時周の代の法ハ祭に用ふる  
牲ハ赤と用ゆるをいふや  
驛して角ありと用ゆるをいふや  
○山川の神を祭に驛牛と用ゆるをいふや  
○山川の神を祭に驛牛と用ゆるをいふや  
○子曰回也其心三月不違仁其餘則  
日月至焉而已矣

仁ハ心の徳私欲を去るに違  
ハざるハ天道の心と同一にして



季康子問仲由  
政之從使可  
與子曰由ハ  
果カウ政之從  
に於て何人曰

賜ハ政之從使  
可與曰由ハ  
達カウ政之從  
小於何人曰  
求ハ政之從使  
可與曰由ハ  
藝カウ政之從  
於何人曰

心ハ活物ゆへに動く動ハ誘ハるゝの如く動ハ誘ハるゝハ難ク顔回の如くハ常ニ心ヲ存シテ仁ニ違ハズ三月ハ久キをりハ三月月ハあハルヲ其餘ハ晝中ハ或ハ夕ノ如ク工夫ヨリ至而巳トゾ

○季康子問仲由可使從政也與子曰由也果於從政乎何有曰賜也可使從政也與曰賜也達於從政乎何有曰求也可使從政也與曰求也藝於從政乎何有  
魚目ノ大夫季康子此ノ人ヲ政務ノ用ニ思ヒ由ト政務ノ從使テ可ク事ヲ御シテ早ク事ヲ決斷ノ由ト果トハ事ヲ事ト訓テ早ク事ヲ決斷ノ由ト

季氏閔子騫を  
費の宰と為使閔  
子騫の曰く善我  
為之辞せよ如我を  
復さる者有ハ則ハ  
吾必在汶の上  
小在馬矣

○季氏使閔子騫為費宰閔子騫曰善為我辭焉如有復我者則吾必在汶上矣  
子騫ハ顔淵ノ亞テ德行ノ名ある御人ナリ時ニ魯ノ大夫季氏ノ德ヲ尊トシ己ガ城下費員トシ所ノ宰ニ使ハルヲ以テ之ヲ招ク然ルニ使者ニ答フハ我決シテ出テ事ノ意ナリトシ我カキテ此事ヲ辭退リテ下ニ居ル如ク復我ヲ招ム事有ハ吾家ヲ捨テ身を隱シ齊ノ汶水トシ川ノ上ニ居ル如ク季氏ガ如ク不忠ノ人ノ富貴ヲ欲セズ其國ニ居テ權門ニ對シテ其詞ノ直ナル事カノ如ク



伯牛疾有子之問  
曰痛自其手執  
命矣夫斯人  
斯疾有斯人  
斯疾有也而

子曰賢哉回  
哉回一簞の食一  
瓢の飲陋巷小在  
人其憂不堪不  
回其樂と改め

賢なる哉回  
再求曰子之道  
と説ハ不非む力  
足不也子曰ま  
力足不者中道  
にして廢と今女  
畫

伯牛有疾子問之自牖執其手曰亡  
之命矣夫斯人也而有斯疾也斯人也  
而有斯疾也

伯牛もやうく徳行の人かよりまうらに  
不幸にして悪病を受くうあつたハ  
頼病かたうとも云ふ聖人  
礼法に君する者来をバ病客南の牖の下に移アて君を  
南面して坐せしやう小尊してか  
尊敬を受めらして外より其手を執て御挨拶ありし  
然る疾最も重く免がらを嘆かうて曰ハク今度ハ誠  
小亡之び命矣いふも天命薄くして深く惜べし  
事なうとハ思ハと再びのりなう

子曰賢哉回也一簞食一瓢飲在陋  
巷人不堪其憂回也不改其樂賢哉回

也 此段顔回の徳を称めたる顔回ハ世に事家貧り  
この故其之を仰めりてたとハツの簞もこの  
瓢の飲食のし常陋巷に在りて其憂  
泰然と落着て天地の道を樂と操めを習ひて其  
世上通測の人なう中へみまうらして其心憂  
いと顔回ハ道を樂と行を改めりて實り賢徳  
稱めたる

再求曰非不説子之道力不足也子  
曰力不足者中道而廢今女畫

再求心より聖人の道ハ大うして及べらざる  
故にとつう曰夫子よへうらまへる元  
然ども吾等不才の及所あるを實力不足か  
聖人聞めりて力不足かるとして自己の畫心  
箱根山邊にて廢る何の益あり中道に廢る是



子子夏に謂て曰

まはく女君子の儒  
と為小人の儒と為  
と無

子游武城の宰と為

子曰まはく女人を  
得る乎曰く澹  
臺滅明と有者有  
行徑小由不公事  
に非ざる未と嘗  
て優之室に至未と

子孟之反伐不奔

而して殿將  
門入を將其馬に  
策して曰く敢て後  
進むま不也

論語 子夏曰、子夏、魯の西門子夏也。子夏、孔子の弟子也。子夏、孔子に曰く、君子の儒と小人の儒とを如何に別る乎。孔子曰く、君子の儒は、女君子の儒と為り、小人の儒は、小人の儒と為り。子夏曰く、然則、君子の儒は、何れを以て君子と為る乎。孔子曰く、君子の儒は、道に由りて、義を尊ぶる者なり。小人の儒は、利を以て、道を背く者なり。子夏曰く、然則、君子の儒は、何れを以て君子と為る乎。孔子曰く、君子の儒は、道に由りて、義を尊ぶる者なり。小人の儒は、利を以て、道を背く者なり。

○子謂子夏曰女為君子儒無為小人

儒學者を以て儒とりの儒ハもことと訓て身とを

操行を正し義理を尊ぶる君子ハ己が身の為ふとて

人の學として外に分かる君子ハ己が身の為ふとて

○子游為武城宰子曰女得人焉爾乎

曰有澹臺滅明者行不由徑非公事

未嘗至於偃之室也子游此時武城とりの所の

らうく小ハ武城の地を治るといふを治るといふ徳有

人をも引挙て用ゐる如ハかり女賢人を得る焉爾乎と

對て曰く鎮分りて澹臺とり名を滅明とらる人

あり常り道を行くを由るを由るを由るを由るを由る

○子曰孟之反不伐奔而殿將入門策

其馬曰非敢後也馬不進也

孟之反ハ魯の大夫なり功を伐ぬ人物として聖人之を稱

のふ一比魯の人数戦敗し時孟之反人数をまよめ殿守

とをかりて毎事に城内へ引こまう殿とハ跡へ引下くひと

邊場數の人かりてハ難とて時此軍子反殿をばくめく

毎事味方を入終り後より城門へ入る時策を以て曰く



祝鮀之佞有不レ有レ宋朝之美有レ也  
難乎今之世に免レる

此馬駱レくして進まきと己を得ましめて殿をさ  
やそり敢て後て殿をさしてしられあらせします  
○子曰。不有祝鮀之佞而有宋朝之美。  
當時世とるに免れる角に諛言を以て務としる事とを嘆ます

誰能出る戸に由らず  
由不何ぞ斯道に由らず莫し

○子曰。誰能出不由戸。何莫由斯道也。  
人道と離れて八戸時も濟べくらざらば家の戸の如し誰人も家と出入さる小ハ八戸由とぬりのなり然は何故此道に由らぬ多や  
昔勞ハ免れせしやいとらる世の

質文と勝バ則ハ質バ則ハ史ナ質ナ  
野ナ質ナ勝バ則ハ史ナ質ナ  
彬彬然後君子ナク

○子曰。質勝文則野。文勝質則史。文質彬彬。然後君子。  
山奥行田舎の者ハ質勝の者に野に生育ゆ正直朴一偏と野に生育ゆ

人之生ハ直ニ罔ニ之レ幸ニハ幸ニハレ免ル

○子曰。人之生也直。罔之生也幸而免。  
人の世には毎事小生て居住とらぬ正直ならずがゆへに本天道ハ直なる事を好むとらぬ今道ハ背する者の毎事幸はいちに生てあらぬ者とらぬ必竟に

之を知者ハ之を好む者に加不之と好む者ハ之を樂む者小如不

○子曰。知之者不如好之者。好之者不如樂之者。  
人道を知て悦むとらぬ者あらず然らぬ深く道を好む心を用とらぬ者小如不如とらぬ道を好む者ハ樂むとらぬ場は不如なり

論語集注 卷之三 子罕篇第九



中人以上以上を以て上を語可し中人以下を以て上を語可し不可

樊遲知を問子曰まはく民の義を務む鬼神と敬して之と遠ざく知と曰まはく仁者ハ難

○子曰中人以上可以語上也中人以下不可以語上也凡そ人の過ハ免らざる人の気

先才智ありて中より以上の人物ハ打上る事と語ハ可なり中より以下の者に打上る語ハ不可なり唯耳ハ入るのとならざるに却て誂を得

○樊遲問知子曰務民之義敬鬼神而遠之可謂知矣問仁曰仁者先難而後

獲可謂仁矣樊遲知と仁との二ツを可奉り御答知とりの者ハ民の義を務む

義と宜と相通するなり人々行て宜きことと務む者ハ忠と務む者ハ孝を務め凡そ家業を大切に務む時ハ心悔となり心の悔となり事ハ皆始に務むと急ぎて依てなり心は悔ゆへ

神鬼を弄玩けり然るに人の義を務むて心悔段は鬼神立よるとりハ皆惑なり鬼神敬とる

仁と各人の行に尽す道と務むるとして務の顔が惡し而して其報ある事ハ自然に待てし心の心ある道

○子曰知者樂水仁者樂山知者動仁者靜知者樂仁者壽知者ハ知ハ理に達し

如さゆへ水よ比ぢ依て水を好むハ知ハ常と動くやうに又知あるが故に苦しまど依て動も樂も

仁者ハ心を得て義理より身と安し故に山よ比ぢ依て山を樂むとハ心と煩さるゆへは命壽とハらあなり仁知を説くこと

知者ハ水と樂む仁者ハ山と樂む知者ハ動く仁者ハ靜む知者ハ樂む仁者ハ壽む



子曰まはく齊一

變して道に至る

觚觚ならず不觚

○子曰齊一變至於魯魯一變至於道

此時天下の風俗衰然と雖も齊魯の二國ハ聖人の後にして  
 他の國は異なりと雖も齊の國ハ大公の至の後にして  
 大賢の人なかりと雖も戰伐法令の武威殘さず故に粗して人情  
 覇者とならずして武威政道の風俗殘さず故に粗して人情  
 北月まで魯ハ聖人周公の後にして禮を重し信義  
 を崇む故に風俗徳を好む兩方共々今小國風破れ  
 右の記ゆへ他の國風とハ異なり齊一變能はる變さるバ  
 魯の如くなく魯日やうと一變さる右の如く道に至るべしと

○子曰觚不觚觚哉觚哉

觚とらへる各の不正あれども其形も違はる變して今  
 觚ハ稜なり此心ハ觚とらへる實ハ不觚なり君臣  
 父子の各ありと君ハ不明臣ハ不忠父ハ不慈子ハ不孝  
 かりとられ君臣父子とらへるのよめりと今の觚を以て

豈觚とらへの理

○宰我问曰仁者雖告之曰井有仁焉

其從之也子曰何為其然也君子可逝

也不可陷也可欺也不可罔也

宰我问て曰く仁者之は告て井有仁有と曰と雖も其之は從んや子曰まはく何為ぞ其然らん君子ハ逝しむ可し陷る可し不欺く可し罔可し不

宰我學を崇むし未厚うと故に心に思ひ  
 身の害を免る事も有やと此問なり雖バ仁者  
 向て只今隠し井の中へ仁落さずと告バ如何に  
 心強ゆへは續て助人と其中へ跡を遺てりや如何  
 御答何為し其然らん下固より君子ハ理を正し明  
 最とも人を仁と強ゆへ其場処までハ到る中くその  
 中へ欺のまに陥入るとハあらずと只理のある事ハ其言を  
 信じて罔よさやうかと押付ハ成すべしと

○子曰君子博學於文約之以禮亦可

君子ハ博く文を學で之を約するに禮を以てき亦以て







夫仁者己也立己  
欲して人を立己を  
達んと欲して人を  
達と

能近く譬と取を  
仁の方と謂可己  
述而弟七  
子曰まはく述て作  
不信トて古と好し  
竊に我老彭と  
比と

黙して之を識  
学で厭ハ人と誨  
て倦不何を我よ  
有とせん哉

徳を脩不学と講  
不義を聞て徒  
と能ハ不善を

て猶不足なりと申す能衆を済仁徳と謂可也  
御答是程の廣大なる事ハ中く仁と申すのべからざる是  
必也聖人の大徳なり右の聖人堯帝舜帝は此  
事ハ一も御心を勞しめんと申す中く博く施し能済と  
り事成難し御心の聖人の猶常と申す  
諸

欲立而立人己欲達而達人  
仁者のころハ

能近取譬可謂仁之方也已  
及とを仁の  
がとりなり

仁の方と申す右の外に能己が心を以て  
人の心より譬へ及とをとりなり也己

述而第七

子曰述而不作信好古竊比於我老彭

道とをたつる者ハ私よ作為たす事ハあらずと比  
是古へ大聖の御方天地の鬼神陰陽の道を法と  
ひて制作あり吾今古への道を述而のりて  
能作らざるの御詞なり吾今古への賢人の老彭といへ  
人ハ古への道を尊んで聖人の道をも世の中へ述傳  
人なり依て自己の仰ぐも深く身を退めて手前  
も竊此人の心と比する我國我郷  
なぞの字ハ親とてなすの詞なり

子曰默而識之學而不厭誨人不倦

何有於我哉  
黙して之を識とりの知者ハ往來  
聖賢も右の道を學て少くも厭あること  
仁者ハ人の教施しを以て心のゆるる倦もさるなり  
此三つの行吾如者ハ何なり  
有と徳なりとと

子曰徳之不脩學之不講聞義不能



改らざる能く不是  
吾憂也  
子之燕居申申  
如々夫夫如々

甚し吾衰久矣  
久し吾復夢見  
周公を見不

道志ざり徳小  
據仁に依藝に游

自東脩以上を行  
吾未嘗て誨  
と毎あり未

徒不善不能改是吾憂也  
身は徳之脩行を  
學びし事も講を

○子之燕居申申如也夫夫如也

此段ハ聖人の平生實大なる御容を側の人に見受  
を記しなかり燕居とハ聖人事業の與りつとなく静  
居りし時をり申申とハ舒くお實なる息なり  
夫夫とハ顔色さうりく悦を含まぬの白なり

○子曰甚矣吾衰也久矣吾不復夢見

周人をも夢見りし時ころ思ひつめ事ハ不知所  
の法を説く最も周公ハ大徳全備の御方ゆへ常  
その人を思ひまゝの故に年壯りつとあそむし時ハ夢  
見ゆしとなく此段ハ年老ゆへ時假その御詞  
なり吾近ころハ衰へ甚矣と見ゆ久矣周公と夢見

見る事の  
あつたこと

○子曰志於道據於徳依於仁游於藝

道とハ今日人の行へべき者をいふこと志とハ心と云ふ  
審歸する時ハ他が惑なり徳とハ徳とら字の心なり  
道理を心より得てそれを執據ていふはざるなり仁とハ  
私の心なさをとりつその清き場り心を依て置かり藝  
とハ礼法樂府射藝馬御書筆算數の藝等なり  
玩を遊とら此段人の學問をなすを心持かり先學問ハ  
志と立ちあふりして徳に據ハ心を失はざるに依り  
利欲心のやゝく行自然となり夫より六藝を弄  
玩てころり適とハ樂めハ  
自然と寛大の場へ入りし

○子曰自行東脩以上吾未嘗無誨焉

此段ハ聖人の人をいふの善道へ導きし事切なり  
たとハ浮氣おも學とさへ唱て来るハ猶豫なく苦



憤げん不ば啟け不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ  
不ば發はつ不ば悱ひ

教しよのへさる事こと薄はくなりとなりと束脩しゆしゆとハ始はじて来きる時ときの進すす物もの  
なりと至いたりて輕かろ薄はくなりとふたと束脩しゆしゆを行い来き入いり門かどと云い唱な  
以上いじやうの人ひとハ吾われ嘗なほよくと誨をたづむことの毎まい事ことあらははむと  
束脩しゆしゆハ脩しゆともふくを束たづめるものなりと

○子曰いひ不ば憤げん不ば啟け不ば悱ひ不ば發はつ舉あ一ひと隅ぐま不ば  
以もつ三さん隅ぐま反へん則すなはち不ば復ふく也なり

教しよのへ先ま引ひと張は失しをもめ身みを正ただして心こころを正ただしては機は變へんをも用もちひて學まな者もの  
師しのへゆり所ところなりともも的てきのへ向むかひて機は變へんをも用もちひて學まな者もの  
のへ手て練れんありと今いま少すくしといふやと得えることとも師しとも者もの  
通とほずともも今いま少すくしといふやと得えることとも師しとも者もの

是こゝをも放はなすこととも悱ひともハ自おの己の心こころをも合あははすこととも悱ひともハ自おの己の心こころをも合あははすこととも  
口くちをも迷まいりともて言いひつらとめ位ゐをも師しとも其その理りをも發はつすこととも  
隅ぐま有ありと悱ひとも程ほどふこととも一ひとの隅ぐまをも引ひ舉あげて示しすこととも時ときハ學まな者もの三さんの  
益えきとも仰おほむこととも則すなはち復ふくせし不ばとも仰おほむこととも則すなはち復ふくせし不ばとも

○子食く於お有あ喪さう者もの之の側わき未な嘗なほ飽あ也なり

聖せい人にん常じやう親おやの喪さう有あ者ものにも出い合あははすことの側わきにも相あひあははすこととも  
時ときハ其その人ひとの哀あはれととも嘗なほも食くをも其その時とき飽あとも遊あそぶこととも飽あとも遊あそぶこととも

子於是日哭則不歌

聖せい人にん喪さうありと家いへの哀あはれと哭なみふこととも其その日ひにも於おてもハ  
其その哀あはれと情なさけをも亡なしめることとも歌うたのへにもならずと

○子謂い顏淵げんえん曰い用もち之の則すなはち行い舎しや之の則すなはち藏かく惟たゞ

我與爾有是夫われとみづかひに顏淵げんえん曰い御ご物もの語ごハ今いま小こもも奉ほう用もち

形かたちハも我われとも再またとも深こほくと是こゝ意いありと夫こゝとも仰おほむこととも子路しよ曰い子しよ

行い三さん軍ぐん則すなはち誰たれ與とも子路しよ曰い子路しよハ勇ゆうをも好このむこととも依よりて志こころざしをも

文ぶん德とくのへ於おても然しかりと若ごとくも軍ぐん執とつこととも以もつても雌め雄おとこをも争まをすこととも  
戰いくさのへ一ひと事ことにも於おても誰たれとも與ともとも三さん軍ぐんとも

子路曰い子路しよ三さん軍ぐんとも行いくこととも誰たれとも與ともとも

子顏淵げんえん曰い謂いて曰いまもハも之の用もちをも則すなはちも行いくこととも舍すつこととも

子喪さう有あ者もの之の側わき未な嘗なほ飽あ也なり  
に食くまらずと未な嘗なほ飽あ也なり  
て飽あ未な嘗なほ飽あ也なり  
子しよ是こゝ日ひにも於おても哭なみふこととも則すなはち歌うたをも不ばとも



多入數千者なり一軍の數二万二千五百人なり  
此段ハ子路勇を以てハ能得たりとあるなり

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也

必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也

子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也  
必也臨事而懼好謀而成者也



戰ハ誠ニ國家の人民の安危よからる事なり最トモ大事トシテ疾ハ人々擲テ爲リのよてなれども多クハ身を謹ムるに起る孝子トシテ都豈慎ムルヤ

子齊小在韶と聞て三月肉の味いと知不曰まはく圖不樂を爲之斯と至んとハ

○子在齊聞韶三月不知肉味曰不圖爲樂之至於斯也

聖人齊の國よ在セし時舞の作りあ帝の明德大ニ備テ義尽シ善尽シし之を所ハ誠ニ百歳の下より礼樂を以て其大徳を知レ堪タリ聖人

冉有曰く夫子衛の君を爲ん乎子貢曰く諾吾將之と問んと將

○冉有曰夫子爲衛君乎子貢曰諾吾

將問之此時聖人衛に居るハ冉有の心は衛の君ハ無道御意小衛の味方とシテ思召ルヤ如何と子貢の問ナリ依テ子貢諾とありテ吾將は試と問となリ

入て曰く伯夷叔齊ハ何人ぞ曰まはく古之賢人也曰く怨之乎曰まはく仁と求て仁と得と又何と怨人出て曰く夫子爲不

入曰伯夷叔齊何人也曰古之賢人也曰怨乎曰求仁而得仁又何怨出曰夫

子不爲也先古の伯夷が事を問史記に伯夷叔齊の兄弟ハ孤竹城の君の子ナリ兄を伯夷といふその父死去するに及テ叔齊を愛して是は跡を譲との遺言ナリ元より伯夷ハ孝として父の命を重し身を退くと欲すと弟の叔齊ハ天道の常人倫の道たるハ兄を

世に立んと思ひて我此に在てハ不可ナリと身をも隠し遂に兄弟とらに出去り子貢是事を以て可て曰く伯夷叔齊兄弟之行如何御答如此の人古之賢人ナリ子貢また曰く二人とも父の命を怨むの



子曰マハク疏食ソウシキと

飯イハ水ミヅと飲ノミ肱ヒコと

出デて之ノと枕マクラと以モ樂ラク

亦モ其ノ中ニ在リ不レ

義ギに於テ富トシ且ツ貴ク

我ハ我ハ於テ浮フ雲ウン

の如ク

我ハ數ス年ニと加シて

卒ニ以テ易シ學ブ

以テ大ニなる過チまら

毎ニ可ク

本文の五十の字ハ

卒の字のあやまら

子の雅言ガクの如ク

所ノハ詩書執禮皆

雅言ガクなり

葉公孔子を子路

小問子路對不

心なごや御答小何ぞ怨とりし事あらん何も仁の明う

かふる場をも行ひ得らるるなり子貢心よりつやう聖人必む

輒ハ如ク不レ孝ノ人ハ與ス一ノのハむと

さうして冉有小物語せしとかくの如し

○子曰飯疏食飲水曲肱而枕之樂亦

在其中矣不義而富且貴於我如浮雲

此段聖人義理の重さを示し疏なる食物を飯と

かふる身も不義の榮ハ天人ともに已むる浮雲の如く

有レのとまればハ毎ニ如クたらう

○子曰加我數年五十以學易可以無

大過矣聖人とし易ハ窮中をりむむとの事

年數を歴て此道よ心を及ぶし學をなるとバたとし知

得と能ハ不とも大なる過失毎よりやまてハあらんりの

とて今の世は僅にらるる物を計るるもの戲を

以て自己易は通じしと思ひやそ是等の事小生産

の事と定めりらんとさる愚者こそ

實り易を穢とらふりのなり

○子所雅言詩書執禮皆雅言也

聖人の雅く言はるるの事ハ大抵その三事なり詩

經ハ人情に通じ書經ハ國家政道の法式を禮ハ

高き下を尊卑文ロその且を小叶の道理を弁智

所なりさるる皆人の常は執守る事として亡女は口の

むましく言処り

あつととらう

○葉公問孔子於子路子路不對

葉公ハ林之國葉とらふ所の一縣の尹なり自己僭上

して公とらひたり聖人の人為とらふるなり



子曰「女奚曰不其人為憤也」  
發一食忘心憂  
樂人下以憂  
忘老之將至  
將也知不云再

我生之之知者  
非古也  
敏以求之者也

子怪力亂神  
語

三人行必有我師  
有善者擇  
不者改之

天德予予  
桓魁其予如何

子曰「女奚曰不其人為憤也」  
誠一聖人の大徳言述  
故一子路への可なり  
子路對  
子曰「女奚曰不其人為憤也」

不曰其為人也發憤忘食樂以忘憂  
知老之將至云爾  
聖人之事  
仰七葉公吾事  
子曰「女奚曰不其人為憤也」

其理を得ざる時ハ憤を發して食事をし忘心憂  
得る時ハ樂二小ハ忘りて心憂とレ事を忘るレか  
の如して年の老とを不知れ吾

子曰「我非生而知之者好古敏以求之者也」  
聖人にして天地古今の事一通レるレ也  
中レく左レ非レ我古昔の大道を好レ敏レ以求レて

子曰「子不語怪力亂神」  
聖人常レ此四ツの事を  
物語レらば其レ條一切

子曰「三人行必有我師焉擇其善者而從之其不善者而改之」  
事一を願レひ不レ賢レなる事一を見てハ吾身一を省レみて慎レむ  
事一を願レひ不レ賢レなる事一を見てハ吾身一を省レみて慎レむ

子曰「天生德於予桓魁其如予何」  
天徳を予予  
桓魁其予如何

子曰「天生德於予桓魁其如予何」  
天徳を予予  
桓魁其予如何



桓魋とて悪人あり聖人を害し奉らんとせしとあり  
その時の御詞なり邪正とを害せんとせしとありと云元  
如何我の徳を與めぬ桓魋の如き道に逆者  
如何の專心とせしと必ず大事り及せしと云

子曰三子以我為隱乎吾無隱乎

爾吾無行而不與二三子者是丘也

御門人の心何れも竊りてあやう聖人の道ハ餘り高く大なり  
して通れぬと云くも深く理を隠しぬ事なりやと

疑ぐの偽て仰せらるるハ三子必ず我を以て隠と有り  
疑ぐの偽て仰せらるるハ三子必ず我を以て隠と有り

吾朝夕起居進退物に交る處教ふ非ざる事なり  
行なつて二三子の輩に與ざる者なり道ハ人の日々に

行なつて外  
あつてと云

子曰四教文行忠信

先聖賢の文を讀べし身を行を脩むべし知を行ち  
その中忠と信と最も心の本主なりと以て之を尊しと云

子曰聖人吾不得而見之矣得見君

子者斯可矣 聖人の徳ハ世に乏しく見んと得む  
見んと欲する可矣と云くハ君子の徳ある人と云

子曰善人吾不得而見之矣得見有恆

者斯可矣 上の意ハ同じくせめて善人を見んと  
不得と云く恒有者を見ハ可矣と云く

子曰善人吾不得而見之矣得見有恆

者斯可矣 上の意ハ同じくせめて善人を見んと  
不得と云く恒有者を見ハ可矣と云く

亡而為有虚而為盈約而為泰難乎

有恆矣 危て實なり事の上向むるハ  
の節操有と云くは徳亡而有げ

子曰三子以我為隱乎吾無隱乎  
我を以て隠と為  
乎吾再は隱と云  
無し吾行かると  
して二三子に與  
不者無し是丘也

子曰四教文行忠信  
子四を以て教ゆ  
文行忠信

聖人吾得て之を  
見不君子者を見  
を得て斯可矣

善人ハ吾得て之を  
見不恒有者を見  
を得て斯可矣

亡して有と為虚  
去ちて盈と為  
約去ちて泰と為  
と為難くハ恒



有と

子釣して網せ不  
弋して宿と射不  
網はつまに網と引  
て網をとり其  
場所をまゝりて  
取つくと物さう

論語二  
為し内なる物なく虚を事をば盈くたる中より為  
心約く若めるとと泰なりと為ると類の人ハ恒に節  
操を失ハむ  
とハカ難し

### ○子釣而不網弋不射宿

聖人の御年の時家貧なり其時孝養と神  
祭の事より付て心よ己とを得るを得て釣と弋との  
二つを遊ばせり魚肉の用を足らざる然らば魚を釣ハ  
死を送るを待てるとゆふ少くもその事よりして  
種を尽さず網ハくも宿鳥としてりや樹木は留り  
以て鳥をばさるる宿鳥としてりや樹木は留り  
竊く鳥をとりての毎体なる事ハまじりて見ると魚肉ハ世  
此段心を脩謹であらむとて廣く見ると魚肉ハ世  
是是非り用ゆる物なり夫れ付て仁者の本心  
を用ふ段ふらく感心とせむは仁愛の心なり  
仁愛の心ありて人の殺生戒をたむ事高き似て用ゆ

蓋し知不して之を  
作者有ん我ハ是  
無多く聞て其善  
者を擇み而して  
之は徒ら多く見  
て之を識ハ知之  
次也

互郷與言難し  
童子見ゆ門人惑

其進を與其退  
之と與と唯何ぞ

○子曰蓋有不知而作之者我無是也  
多聞擇其善者而從之多見而識之知  
之次也

作爲せらる者ありん我決して是なり我多く明智の心  
地へを聞かれを参り考て其善者を擇むと多  
擇見て其善者能智の人の次とハりあり  
未だ實る其理を

### ○互郷難與言童子見門人惑

互郷とらる郷の風儀ハ性悪く與言言語の出来ぬ  
人柄なり然る小今童子一人聖人へ謁見願ひし  
小早速御逢あり依て子曰與其進也不與  
門人惑とらる惑あり



甚く人己を  
潔くして以て  
進み其潔きと  
與に其往と保不

子曰まはく仁遠  
く人哉我仁を  
欲まは斯に仁  
至る

陳司敗問昭公礼  
を知乎孔子曰ま  
はく礼を知  
孔子退く巫馬期  
を揖して之と進  
て曰く  
吾聞君子ハ黨と不  
と君子も亦黨と  
乎君呉も取同  
姓あるが為よ之と  
呉孟子と謂君よ  
して礼を知孰  
礼を知不人

其退也唯何甚人潔己以進與其潔也  
不保其往也  
改めし道に進み其潔きと與に其往と保不  
與に事なり一物事唯其甚しきハ何れより進み  
誰人より進み其心を潔くして進み來りその潔き所  
を以て進み其往と保不  
保らざることを仰らる

○子曰仁遠乎哉我欲仁斯仁至矣

心ハ動かし中を散らす人ハ心をも散らす事なく  
欲し動かし道理を踏と能はざるなり仁ハ本心の全  
徳なり人々を求めんと難しや  
仁の徳何れも遠方より在りて求め難しと  
我仁を求めんと欲  
早速斯へ出来ると矣

○陳司敗問昭公知禮乎孔子曰知禮

陳の國にして司敗とあり官名ハ分明なり魯  
の君昭公の事を聖人へ問奉りて昭公ハ礼を  
知りて御答ハ聖人  
吾國を重むるの至なり  
進之曰  
御門人巫馬期  
孔子退揖巫馬期而  
曰く  
吾聞君子不黨君子亦黨乎君取  
於呉爲同姓謂之呉孟子君而知禮孰  
不知禮  
司敗の詞は五兼て聞  
君子ハ周く  
不義なり魯の昭公を以て礼を  
見てハ君子も亦黨  
一のや元魯と呉とハ同姓の血脉  
一のて婚姻をなすを理なり魯と呉とハ周の血脉  
一のて姫姓なり然るに魯の君呉より妻取めてて姫



巫馬期以て告子曰  
まぐ丘幸ひまう  
苟くも過まら有  
人必む之を知

子人與歌て善  
必む之を反と使  
而して後之と和

文吾人の猶と莫  
躬君子と行ふハ  
則ハち吾未ど之を

得と有未

若聖と仁與ハ則  
ハち吾豈敢てせん  
抑く之を為  
厭ハ人をも誨て  
倦不則ハち再云と  
謂可已公西華曰  
正唯弟子學と  
能不

姓を各来てハ目よめゆへ姫をやめ呉孟子と唱て  
子姓の中より二母をたりたりり照公を礼を知と  
礼を不知者はし  
**巫馬期以告子曰丘也幸苟**  
有過人必知之  
巫馬期も答ふと能て聖人へ  
答ふ誠り吾過りて有ん凡て過とり者多ハ知め  
勝りて通るゆへ改むとたりたり我ハ幸ちる者より  
過らあまバ人より多りて告てて  
仰せたりり人より者主君の事と語り忍んや

**子與人歌而善必使反之而後和之**  
聖人常の御挙動を見たりて記し誠は聖人の御氣  
象従容と狼心たる処を見らば聖人人と與て歌て  
り面白善と思召とて今一友反と使て後より  
和りのふとたりり和とハ一処よりして謔覚ゆること

**子曰文莫吾猶人也躬行君子則吾**  
**未之有得**  
此聖人謙退の御詞なり文とハ礼  
書をも説或ハ礼樂も及でハ吾他人の猶く莫とら  
心ハ其場へも行べりとちやちや吾躬君子乃  
行なふと行とハ誠よ  
得るとの有未とを

**子曰若聖與仁則吾豈敢抑為之不**  
**厭誨人不倦則可謂云爾已矣公西華**  
**曰正唯弟子不能學也**  
此亦謙退の御詞吾  
仁の道との若ハ及もたかこてたつ豈敢て其場居  
や唯吾行所ハ抑右の道を為て心ハ厭と少しも  
たかく人の教及りて倦勞とらう是程迄の事ハ再く  
さうと云も謂可已矣公西華さうく感嘆して此ニ条  
中く弟子の學で得るとなればとされ



子の疾病あり子路禱ると諸子曰はく有諸子路對て曰く之有誅小曰く再を上下の神祇に禱子曰まはく丘之禱と久矣

奢ハ則ハ不孫多儉さば則ハ固なり其不孫も與ハ寧固なるん

君子ハ坦蕩蕩小人長戚戚

論語

三十一

王陽明

○子曰疾病子路請禱子曰有諸子路

對曰有之誅曰禱爾于上下神祇子曰

丘之禱久矣此時聖人御不御して疾少く病

快然を禱とあひて聖人へ請ひて聖人の仰せ小言の事の故實有諸となり子路對てりや古の誅の文の中は平生の罪を懺悔し再が疾を上神下祇に禱との詞あは右來り遂有事なりと述奉る然聖人子路に御禮謝あつて仰せあるはりや罪を懺悔して神祇に禱との事なりバ我已に禱をなせし事なり今日近久矣問のり置て先その儀よ及ぶことなり此段子路ありは聖人を大切と思ひ奉りつる聖人の御意に達せざるや夫聖人の徳天地と齊く心廣大くして言ハ法となり動ハ人の則となり元より行の欠くる事もなきは何を禱とす事あるんや神聖一致して目よ見を聖人といひ見可なりぬを神と

り何れも人知の測

○子曰奢則不孫儉則固與其不孫也

寧固凡て奢を為者ハ物不孫なり又儉固なる者ハ極て舉動固しそのなり何れ中庸

なるぬ病なり然ども一方をさるなり其不孫身持を為與ハ寧固も身をさるなり勝つと仰せらるし東照神廟の御詞より身の程を五字仰らるし上を見さるの仰ありし世は是を五字七字の御教と傳へ待ら

○子曰君子坦蕩蕩小人長戚戚

上は君子君子は徳有る人ハ自然容顔の見受相違ありのなり坦とハ地やうたうをさる湯々とハ長く廣くゆるゆるなり又福を小人ハ長く戚々とて心せり行つる

論語



子温小して厲い威いとして猛たけ不お恭こ小して安やす

# ○子温而厲威而不猛恭而安

此章ハ御門人衆常ニ聖人の御挙軌容貌を見受奉りてかくハ書載たり人聖人の御氣象温和之として春の暖かなる晴くして天氣の如く然とも物の决断果し易く同よ髪を入むるを厲とらふこと光くゆるかなる御權威ありて却て猛く荒く布風を見奉りて人々恭敬をほくしとどを却て人も容心よなく心安く親付る様よぞあり

## 泰伯第八

子曰泰伯其可謂至德也已矣三以天下讓民無得而稱焉

此段心を潜て見べき多至徳とらふ者ハ誠よ

天朝の道は合ををいふべし泰伯ハ周の大子の遊子其弟と季歴といふ季歴の子文王に至て天下三放

泰伯弟ハ  
子曰まはく泰伯ハ  
其至徳と謂可已  
三とび天下を以て  
讓る民得て稱  
すると云

の二を保服せしめり文王の子武王に至りて遂に殷の紂王の悪逆毎道なるを除去して天下を取らむる大徳仁取王にして最も武王に至りて万民の苦を救ひて天下の爲に己と得りて天下の主となり万民を仰ぐ尊と仁君なりと云く泰伯を至徳なりと仰ありしは子細ハ殷初大王の時殷を除の志あり然る小泰伯の心は臣として君を討べんとて從ハも遂に身を避て跡を隠し以上三とび國を讓て世の望を断り四人は至徳賢明のがたも天遁自然の道を踏ハ泰伯一と云ふは此上なる至徳なりと仰らる是を天下の人より落し稱美ありと云ハ口惜き事なりと云りて聖人々々ハ褒義あり至徳ハ聖徳至極上なるをいふ右大王も賢人なり文王武王元より人の知る然るは未だ何事もなき大王の時己を殷を討めんと志す少く後世の辱をふぐも泰伯ハ父を從ハむして跡をかく後世の辱を逃る聖人これを至徳と稱め聖人の深意を格別の論なり危を天地の間君臣の道を至て重しと云



子曰まほく恭にして

礼毎をば則ち勞と

慎で礼毎をば則ち

勇オウ小して礼

毎をば則ち乱直

にして礼毎をば則

ち絞セウと

君子親オウ篤オウ々オウれば

則ち民オウ仁オウを興オウと

故舊オウ遺オウ不オウば則ち

民オウ偷オウ不オウ

曾子疾有門弟

子と口で曰く予が

足を啟け予が手と

啟け詩云く戰

戰兢兢として深

淵は臨し如く薄

氷を履が如し今

みて後吾免る

と知夫小子

天地上下君臣尊卑の義理なりて其他何の道も  
天朝の中華西夷の上なる事ハ此の外ならず  
さうを以て

○子曰恭而無禮則勞慎而無禮則慙

勇而無禮則亂直而無禮則絞

禮ハ物を正し人道の過るに及ぶ程の制  
しむたるとハ人を恭まじらさうハよとて礼を不知バ

則ち心オウ勞オウなりオウまほく慎オウむオウとオウをオウ知オウつオウてオウ礼オウをオウ知オウつオウざオウればオウさオウら

のさうオウ慙オウなりオウまほく勇オウ氣オウをオウ好オウでオウ礼オウをオウ知オウつオウざオウればオウ極オウて

場所オウをオウ弁オウさオウすオウべオウきオウ狼オウ藉オウなりオウまほく正オウ直オウよオウしてオウ古オウ馴オウぶオウるオウ人

礼オウをオウ知オウつオウざオウればオウ極オウてオウ何オウ事オウもオウ猶オウ豫オウなくオウ物オウをオウさオウうオウ解オウて

さうオウ窮オウ屈オウなりオウ右オウのオウ四オウヶオウ条オウをオウ以オウてオウ礼オウのオウ子オウ子オウべオウきオウるオウ

るオウ多オウくオウ人オウのオウ過オウ失オウさオウうオウはオウ出オウさオウ絞オウとオウハオウこオウ付オウてオウ急オウ切オウなりオウ

君子篤於親則民興於仁故舊不遺則

民不偷

引オウさオウるオウのオウ先オウとオウ假オウ初オウのオウ者オウをオウ次オウとオウんオウをオウ親オウと

篤オウとオウらオウ然オウるオウ時オウハオウ下オウ民オウもオウさオウうオウ仁オウ心オウはオウ感オウじオウ義オウ理オウのオウ心

其オウ興オウとオウるオウ遺オウざオウればオウ民オウはオウ迫オウりオウ人情オウありオウ心オウのオウ信

偷オウ不オウとオウなりオウ

○曾子有疾召門弟子曰啟予足啟  
予手詩云戰戰兢兢如臨深淵如履  
薄氷而今而後吾知免夫小子

此段曾子の疾重の時門弟子を招て細く教へて  
曰く衣を啟き手足を改むべし此身ハ是父母より  
受得たる大切の身なり全して死さうとて孝とらり  
危る父母を思ひ平生懼慎しむべし詩經の詞は示



戦れ競ひて深淵を臨見が如く薄氷の上を履く如くさうくして吾今日身を全して死も事を得免る是よりハ父母を孝心の苦勞を誠は孝心の至と

曾子疾有孟敬子之問

○曾子有疾孟敬子問之 曾子の病中曾子の大夫子孟敬子

曾子言曰鳥之將死其鳴也哀

曾子言曰鳥之將死其鳴也哀 曾子大病孟敬子へ御話あり夫鳥獸といふものハ

小死之謂也將其言

人之將死其言也善 曾子大病孟敬子へ御話あり夫鳥獸といふものハ

君子道之貴乎

君子所貴乎道者三動

容貌斯遠暴慢矣

容貌斯遠暴慢矣正顔色斯近信矣

出辭氣斯遠鄙倍矣

出辭氣斯遠鄙倍矣籩豆之事則有

存

司存 君子の道に於て重むべきその品ニッあは第一

籩豆之事則有存

籩豆之事則有存 右の三品ハ身を脩め政事を為の要なり籩豆瑚璉等の諸礼器物を持扱はそれくの司有は

曾子曰以能問於不能

○曾子曰以能問於不能以多問於寡

有若無實若虚犯而不校

有若無實若虚犯而不校昔者吾友嘗

從事於斯矣

從事於斯矣 曾子常に我多能なり

吾友嘗て事

吾友嘗て事 曾子常に我多能なり

斯は徒

斯は徒 曾子常に我多能なり



如く實て有るも虚なきが如くたゞハ人なり我  
を觸犯とありとも我ハ直なり彼ハ狂なりと心を  
寄て詩校ふるなりハ有るハ昔吾友の顔淵の事  
是毎我のころの行ひなり昔吾友の顔淵の事  
仰らる

曾子の曰く以て  
六尺之孤を託す  
可以て百里之命と  
寄可く大節よ  
臨んで奪可く不  
君子之人與君子  
の人也

○曾子曰可以託六尺之孤可以寄百里  
之命臨大節而不可奪也君子人與君  
子人也

國家の爲に孤子を託し輔佐して下知を司る  
假令難義大節なる場は臨し志を屈せざらん  
奪ハれども利に迷はざるは君子の人なり實に  
君子の操行と云ふは六尺の孤又ハ五尺の童子と云ふ  
この數よわらざるも通用して孤子を  
り義なり百里と八百里の一國をり

○曾子曰士不可以不弘毅任重而道  
遠

凡そ志あるの士ハ心弘く毅して堪忍あり有  
遠べ弘大なるがれバ任物の重く大なるを置く  
行はば是故にハ説の  
仁以て爲己任不

亦重乎死而後已不亦遠乎

仁の事なり人心の徳を取守るとハ至て重きことなら  
ば何れ道遠しと云ふは身老て死するに至る  
操を堅く守るは遠く  
久しかり

○子曰興於詩

右人學同を爲め次第なり右の  
教へ詩書禮樂とハ是なり詩經  
の徳ハ毎く述ぶる人情に通し惡を徴しめ  
善を勸ふるの道なるハ人の善心を引興と云ふ  
禮を以て用と尊卑を知義理を重し徳内は敬

詩於興  
禮於立

曾子の曰く士以  
て弘毅なると不  
ある可く不任重  
して道遠し  
仁以て己が任と爲  
亦重く不乎死  
して後已亦遠  
く不乎



樂於成

民ハ之由使可  
之を知使可

勇と好で貧を  
疾ハ乱る人  
て不仁なる之を  
疾ハ己甚きハ乱

如周公之才之美  
有も驕且吝さ  
観て足不巳

三年學で穀よ  
至不ハ得易  
不

篤く信じて學  
を好む死を守  
て道善を

成於樂 樂ハ文字の心  
為は動搖さず

の事元來天地四方を象  
而して后は樂和の道用ゆ  
とあり若礼をば徒は樂を  
持弄ハ放蕩は流るる

○子曰民可使由之不可使知之

聖人の天下を治めハ大仁を用ひ  
とよ説法教化して知使ふ事  
ありて政刑と罰を以て惡を  
民齊く治るるを由使とり

所為ハ大量の

○子曰好勇疾貧亂也人而不仁疾之

已甚亂也 血氣の勇を出し人  
己甚亂也 血氣の勇を出し人

身もゆめらめと外に時ハその者身の  
置るるを

○子曰如有周公之才之美使驕且吝

其餘不足觀也已 言心ハたハ  
其餘不足觀也已 言心ハたハ

○子曰三年學不至於穀未易得也

徳を美良人の人ハ  
得不易とあり

○子曰篤信好學守死善道

道を篤く信向き程よ  
たよ道を篤く信向き











武王の曰く予に乱臣十人有  
孔子曰まはく才  
難其然不乎唐  
虞之際斯於  
盛なりと為婦人  
有九人而已

天下三分にして  
其二を有して殷  
は服事と周之徳  
ハ其至徳と謂可  
已

時ハ小人の革つるも徳を得と知るべし是最も弟一の  
義なり右熾帝の天下ハ大徳あり其下ハ尚稷  
皋陶益等五人の賢人を用ひたつた義なり天朝の  
始祖大神天照皇の御宇ハ最も大聖至徳比と  
事なるを司く賢徳を用ひたつた徳日光と配  
奉まつるを賢臣八百と傳中ハ五賢の内攝政天児  
屋根公を重しめて後世までも三社と稱し天位  
分配しその外天朝並萬邦共明君の代ハ  
賢人を用ひたつた事歴代  
武王曰予有亂臣

十人 周の武王の為る世を輔治するの臣十人あり  
孔子の亂の字ハ誤なり亂の字ハ右  
紛らざる者なり孔子曰才難不其然乎唐  
虞之際於斯為盛有婦人焉九人而  
已 才難ハ古語なり心ハ世を治するの才徳ハ真ハ  
得難ハ古語なり聖人の語を引くハ誠

才難ハ古語なり心ハ世を治するの才徳ハ真ハ  
得難ハ古語なり聖人の語を引くハ誠  
世を譲りたると然なり唐の堯帝より虞の舜帝  
の代ハ十人あり大公望周公畢公榮公太頭  
大散宜生南宮适など九人のなり今一人ハ武王の  
妾の内ハ邑姜とて賢女ありよく家の内を  
治めり故に之を筆して十人とハヤなり

三分天下有其二以服事殷周之徳其  
可謂至徳也已矣 殷の紂王の暴悪論  
十國然るに此時文王ハ西伯の位に在りて忠  
の心盡く諫め奉まつる囚小就の心その後  
國を撫安して謀叛を為しめ天下一人として文王  
を戴く者なく殷王と厭悪で文王を天下の主と  
んと稱する大抵の君ハ未歸せざるの内より  
世を奪つたは尚く文王ハ殷の世に屈服して事  
分て二分ハ誠周の御代のとてなり

分て二分ハ誠周の御代のとてなり  
論語二 三十九 王漢卿



禹ハ吾間然然也  
毎飲食ヲ非して  
孝ヲ鬼神ニ致シ  
衣服ヲ惡シて美  
を黻冕ニ致シ  
宮室ヲ卑キ  
てカト溝洫  
也ト禹ハ吾間然  
然也

子罕第九  
子罕言利與命與仁與

達巷黨の人の曰く  
大なる哉孔子博  
く学で名を成  
所ろ毎  
子之を聞て門弟  
子之謂て曰まはく  
吾何を執人御を  
執人乎射を執乎  
吾ハ御を執人

○子曰禹吾無間然矣非飲食而致孝  
乎鬼神惡衣服而致美乎黻冕卑宮  
室而盡力乎溝洫禹吾無間然矣

禹王の大徳 帝カクも聖人も間然一の如ク  
先儉を守自朝夕の飲食を非して祖宗を祀  
享物ハ至テ祭の祀服黻冕を盡シ常の衣服ハ惡ク  
厭として祭の祀服黻冕を盡シ常の衣服ハ惡ク  
樓閣ハ卑キ荒く布して田圃の溝洫也天下の川  
瀆水道ハカカと入物を入れて後世カ其徳沢を蒙  
誠禹王の大徳ニ於て  
間然一の如ク

子罕第九

子罕言利與命與仁  
聖人言利一の如ク  
中一の如ク

三ヶ条カ利と云ク一ハ利と何カ  
あるニツクス命とて福福吉凶定ヤ  
のガ及ガ事あるカ神カ自然ニ助カ  
是カ然カ比自中の至誠カ事カ其  
小ハ聖人天下を治カ大道をカ  
知の者カ説テ却テ益カ

人曰大哉孔子博學而無所成名

達巷とリハ黨人聖人の大徳を  
稱奉ヤカ誠ニ博學とリカ  
一藝ニ名を得カハカ  
子聞之謂門

弟子曰吾何執執御乎執射乎吾執

御矣 聖人言利一の如ク  
何の執カ人ヤカ御ハ馬を御カ



射ハ弓を射の法なり吾之を教ふる此二ツの中を執バ  
最ト射藝ハ上ト者なり吾之ヲ得たるハ御ナク  
御ハ少ト勝  
カウベト

麻冕ハ礼也今純ハ  
儉ナク吾ハ衆ト  
從之

○子曰麻冕禮也今也純儉吾從衆

古礼の冠ハ麻を積で緇く深三十外の經糸を用ゆ  
其一外とりのハ八十縷なり大ニ手間をうけて古礼  
カウベト奢ナク  
為ト手間入キテ儉ナク  
於テ害ナクバ吾ハ當時の風俗  
トイハル衆のガを用ゆベト仰ル

下ニ拜スルハ礼  
也今上ニ拜スルハ  
泰也衆ト違ト雖  
吾ハ下に從之

拜下禮也今拜乎上泰也雖違衆吾從

下ニ君臣の間尊卑上下の道最トも嚴重ナク  
猶天地のト一臣下の分堂下ニ居テ君を拜スル  
ハ右レト然ル小人テハ堂上を許ルト變泰甚  
假令世上の風ト異ル衆の人ト違トも聖人トハ堂下の

礼を守ルベトトナク天地の間教則を承一義トモ  
天朝の異邦ト異ナル者もこれト因テナク誠ト聖人  
の至徳動ルベト

○子絶四母意母必母固母我

人四ツの病あり之を立スルベトトナク  
テ自躬の存トスルヲ用ユニラト期必トハ私の意トモ  
立人トナク定トスルヲ固滞トハ我トナク起  
固滞ト偏屈ナルヲ四ツト己我トハ我意トナク起  
段ト長トナク

○子畏於匡曰文王既没文不在茲乎

序ト述ル如ク人ト違テ取聖人を取圍ル其の時從者  
大ニ畏ル故聖人説示して仰セあり御詞左の  
如ク聖人の道ハ天道ト則ト人ト行ベク道禮樂  
制度トありハ之を文トシ古昔堯舜禹湯の聖

子四ト絶意母必  
母固母我母

子匡ト畏ル曰  
文王既没  
文茲ト在不平



天之將也斯文也  
喪之將也斯文也  
者斯文也與之  
得不天之未也斯  
文也喪之不匡人  
其予也如何

大宰子貢曰固  
曰夫子ハ聖者  
與何其多能

子貢曰固天縱之將聖又多能  
天之縱也將之  
聖者又多能

子之也聞て曰  
大宰ハ我  
知乎吾少なる賤  
故ゆへは多く  
鄙事を能く君  
子多かるん哉多  
か  
牢曰く子云ハ  
吾試らざる不故  
必は藝あり

王より文王に至りて最も周道盛なりて郁郁たる文王  
既に没しては絶えたる今や天より我  
茲に在にありは是也  
天之將喪斯文也後

死者不得與於斯文也天之未喪斯文  
也匡人其如予何  
天より人間の此道を絶え  
たり予も亦亡んとならぬ

事あり然る後の世に生る者も斯道とらざるを  
習知るをある若天より世界をあらはせしむる人間の  
道と絶えたる匡人  
焉の予も害するもの有らざるや

○大宰問於子貢曰天子聖者與何  
其多能也  
大宰とり官の聖人の聖王徳  
所以を知らず多能なるを以て聖と

子貢曰固天縱之將聖又多能也  
子貢答て曰夫子の大徳なるは多能とり  
愚かり上天固より縦に量の徳を與りし事  
其上より多能なるを在まらんと

子聞之曰大宰  
知我乎吾少也賤故多能鄙事君子多  
乎哉不多也  
聖人聞召て曰ハ大宰ハ誠なる能  
我を多かるのなり吾幼少の時ハ身

乎哉果して多能なる不  
牢曰子云吾不試  
御門人琴牢の語かり我嘗て聖人の云を  
聞し右の如く聖人云ハ五口ハ

故藝  
上へ奉試らざる事なかりしゆ鄙事を推さる  
その事も藝ともいふべしと云ふ謙退の御教かり



吾知と有人哉知  
と毎一鄙夫有我  
と回と空空如也  
我其兩端を叩て  
焉と竭と

鳳鳥至不河出  
夫

子齊衰の者を見  
見冕衣裳の者  
と瞽者與之を見  
見少と雖  
過必趨

顔淵喟然曰  
仰彌高之  
鑽彌堅之  
瞻ハ前ニ在  
馬トテ後ニ在

論語

王陽明

○子曰吾有知乎哉無知也有鄙夫問  
於我空空如也我叩其兩端而竭焉

聖人といふは曰はハ吾別ハ悟知るとりハ事ハ元  
よりハ知るとも全愚ハ鄙と人なりとも我ハ就テ學問ハ  
たとい一向ハ理の空空愚音なる人なりともいふに  
道を喻ハ心中誠ハ道邪とを思ふなりともいふに  
其喻ハこの端よりハの端へ始めより終へて終り  
始りてより終りて返りての處なり叩て竭して  
認事ハ

○子曰鳳鳥不至河不出圖吾已矣夫

當世周の末也ころして世ハ道の明ハ衰  
たり古昔文王の御代ハ鳳皇岐山ハ鳴大古伏羲  
の御代ハ河中ハ龍馬八卦の圖を負て出  
たり舜帝の御代ハ鳳凰來義と今テ鳳皇龍馬聖  
主の瑞と一是を以て吾道の  
己と人事とをあらわす

○子見齊衰者冕衣裳者與瞽者見

之雖少必作過之必趨

貴の人なりハ冕を戴ゆハ瞽者ハ目なりともの  
なり聖人誠ハ敬を主とすハゆハ密ある者ハ少  
衰とを隣ハ貴人ハ元ト敬とを主とす者ハ少  
ハ人の身体欠とる者ハ少ハ依てなりハ少  
の者トとも右三人ハ起座を改めぬハ少  
座トとも前とを過ハ必と緩怠ハ必と趨て過  
なり

○顔淵喟然歎曰仰之彌高鑽之彌堅

瞻之在前忽焉在後

論語

王陽明



夫子循循然... 善人を誘ひ我... 博しりて文を... 以て我を約す... 礼を以てと

罷能欲て能... 既吾才と竭... 立所有て卓再... 如之を從... 欲と雖... 由未也

子の疾病... 路門人を臣と為... 使... 病の間曰まはく... 詐... 誰を欺く天を... 欺く乎

顔子稱... 餘高... 御徳... 其限... 鑽て見... 金鐵... 堅く... 手... 夫... 然善誘人博我以文約我以禮

然善誘人博我以文約我以禮... 其妙... 循循然... 道徳... 物之理... 格... 文... 博... 文... 善... 可... 其... 節... 節... 欲罷不能既竭吾才如有所立卓爾雖欲從之未由也巳

教の妙... 事... 聖人の道... 卓再... 心... 寄... 徒... 欲... 靈... 議... 用... 子疾病子路使門人為臣

子疾病子路使門人為臣... 病の間曰まはく... 詐... 誰を欺く天を... 欺く乎... 臣而為有臣吾誰欺欺天乎



且予其臣之手に  
死す。與寧寧二  
三子之手の死  
乎。且予縦大なる  
葬を得ず。予  
道路に死す  
乎。

子貢曰く美玉  
斯有價に韞  
又蔵し諸善賈  
を求て沽諸子  
曰くはく之を沽ん  
我ハ賈を待者  
か。

子九夷に居んと  
欲む或ひと曰く  
陋一之を如何子  
曰くはく君子之  
居何の陋と  
之有ん

要と臣なりと事なかりし事なかりし臣ありし重き  
べきありと今我に既にして臣有とさるは是非禮  
なり我論を欺んとするは且予與其死於臣  
天を欺くといふのなり。

之手也無寧死於二三子之手乎且予  
縦不得大葬予死於道路乎且我假令  
臣下あり

其手はのりしと與ハ金寧二三子の手にして死  
たらんハ心は快然ぞ思ふなり縦かく義が布大なる  
葬を得ざるも義理の叶はんと樂し  
道路の葬とすも若しうら同布のものと

○子貢曰有美玉於斯韞匱而藏諸求  
善賈而沽諸子曰沽之哉沽之哉我待  
賈者也子貢の心は當世衰へ人暗して聖人  
の高大神明たるも道行はるる

聖人用らるるを惜むて今必し聖人道を  
卑屈たるを極て世は重し用らるるべし此事と  
説く奉りたるは斯は金の宝玉ありこれを匱に  
韞て秘蔵せん諸は捨置とも惜む事なまば善賈  
を求て沽べし諸とたりとちるは世の宝とかりし玉を  
以て聖人擬し聖人御器元より空しく捨置事ハ  
金益なり然ば世の宝は用べし事なり元來沽べしと  
理は當る然らば此方より賈を求るハ貧とらる  
者なり向より値を以て求め来るを  
待ハ義理は當る事なりと

○子欲居九夷或曰陋如之何子曰君  
子居之何陋之有中國の道衰へ世の中淺  
布なり

ケ様の事を見ようハ九夷は之て住居せんと欲する  
ののなり東方九ツの夷あり然らば或人哈言して  
聖人實は九夷は之のありと誤りて夷の國ハ  
社を左より侏儻として言語鳥獸の如く風俗至て卑



吾衛自魯友  
然則後樂正  
雅頌各其所  
得

出則公卿  
事入則父  
兄事密の事  
敢て勉不  
不酒の困を為不

子川の上  
如夫晝夜  
不

如何の事ハ彼に在て我與らざる事ハ御谷假令陋く  
子の居るに自能く化して之を擇んて之を以て  
天子の國なり又神職者流中華の禮祭を事毎  
小下しむるも匹夫相佐するの詞なり夫天朝の  
眞は天子の國なり中華の文物義なりとらざる外國  
を以て比をなすと云ふこと論なり

○子曰吾自衛反魯然後樂正雅頌各  
得其所  
魯の君哀公の即位十二年聖人衛の國  
雅頌の殘ひ缺くを  
雅頌の殘ひ缺くを  
得て

○子曰出則事公卿入則事父兄喪事  
不敢不勉不為酒困何有於我哉  
深切に卑を説く内徳を  
公卿の事て位の貴さを示し内して父母  
小事を孝を盡し喪に臨んで哀を盡し酒に困や死  
を慎むる事此條々我よく事有むと云ふ何も  
高き行ひありと云ふ日用の  
間の深切を示し

○子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜  
此段ハ聖人の流に對して水の流逝して止まらざる  
代に不易晝夜の息止たざるを御覧ありて深く感嘆  
言ハ凡て天地陰陽の萬物を生じ限なき  
有惜念なき物其間始てハ終つてハ  
始る一ツの息の滞らざる事斯の如く夫の  
仰かき最も見えて見やると説く者ハ水に如く  
誠は天地の道聖人の他人の行ひも此の外なきを讀  
者ハ其の所最も深く敬して  
その意を味らざる事なき



吾未と徳を好む如  
く色を好む如  
く者を見未

譬如山を為が如  
一篲と成  
未止ハ吾止也譬  
平地の如一篲と  
覆雖も進ハ  
吾往也

之を語て情ら不  
者ハ其回與

子顔淵を謂て  
曰まはく惜乎吾  
其進むを見未  
其止を見未

苗にして秀不者  
有夫秀て實不  
者有夫

○子曰吾未見好徳如好色者也

人の色を好むと甚しとて口を味を好む耳  
の声を好むの類とて色を好むとて心も動さ中  
も最と目も羞色とを好むとて古より甚し  
く不負賤うして身の暇たりとて思ひの外なる  
事のあること危て然らるる聖人の徳を好む  
そのころの斯の如く然るを見未とのあり

○子曰譬如為山未成一篲止吾止也

譬如平地雖覆一篲進吾往也

危を力を用功を成と欲する者今一篲を  
退るハ惜む事なうとやたと山を為る今唯一篲の  
土を置山成就とて夫を成不ハ惜む事やう  
只一篲とて止るも是則ち怠るといふのそ吾止む  
覆るとハ成就とて平地を平ふも一篲とて進む  
是吾往進と  
り者なり

○子曰語之而不惰者其回也與

顔子ハ聖人よ進み御人なり聖人の御とて語る所  
能く心解てその功身は行つたとハ時節の雨を  
得て草木の発達茂育とて如く何ぞ惰と  
有やと仰せられ聖人との其徳を稱するなり

○子謂顔淵曰惜乎吾見其進也未見

其止也

聖人深く顔子を惜むて其徳を稱し  
り只顔子の其徳の進を見て其徳の  
退る止を見  
るハとて

○子曰苗而不秀者有矣夫秀而不

實者有矣夫

学問を為て成就せしむる不為と  
ありて成就せしむる色々の



後世畏可乎馬  
人來者之今  
如不也知人四十  
五十少して聞と  
五ハ斯亦畏う  
足不巳

法語之言ハ能從  
之改あると貴  
為異與之言ハ能  
説ふと吾人乎  
之と釋ふと貴と  
未巳

為諾んで釋不  
從うて改め不吾  
之を如何も  
と未巳  
忠信を主と己  
小如不者を友と  
改むるに憚るる勿  
三軍も帥も奪  
可一匹夫も志  
を奪可う不

品ありたは苗の時芽を出るを以て秀の  
實ざる者あり是を以て君子  
ハ自勉勵  
とと貴りの

○子曰後生可畏焉知來者之不如今  
也四十五十而無聞焉斯亦不足畏也

已後の世の徳の秀る人の出べしと云ふ  
後世も徳の秀る人の出べしと云ふ

○子曰法語之言能無從乎改之為貴  
異與之言能無説乎釋之為貴説而不

釋從而不改吾未如之何也已矣

法語之言ハ正しく直かる教諫を入るなり凡そ法  
あの詞ハ受從がハざる者ありんや然とも之を聞て

忽ち改むるを以てして貴と異與之言ハ人ハ逆ハ  
して其意ハ異與とされしやが便を以て正しと場へ

道引を以てして然る其意の由来を釋来り依て  
説く思

○子曰主忠信毋友不如己者過則勿  
憚改

○子曰三軍可奪帥也匹夫不可奪志



也三軍ハ三万七千五百人にして只多くの人をかくらつゝの  
一且一私セどて心を離れしハ其將帥をも奪得べし  
者なくと仰らるし是故に君子ハ

敝る温袍を夜て  
 孤貉を衣者與  
 立て耻不者ハ其  
 由與

○子曰衣敝緼袍與衣狐貉者立而不  
 恥者其由也與敝る緼袍を著て狐の裘衣

伎不求不何と  
 用て臧を不らん

不伎不求何用不臧此詩を引て重て稱義

深く心は耻るものなり或ハ人の富るを疾て懐  
 害の心ある者なりは子路ハ其の場ハ其の心あり

然をバ何事よ於ても  
 臧と稱むるに

子路終身誦之子曰

是道也何足以臧此詩を引て重て稱義

是道何を以  
 て臧とせらるに足ん

事ハ臧とせらるに足らざる事なり

○子曰歲寒然後知松柏之後彫也

歲寒して然して  
 後ハ松柏之後彫  
 を知

小人と君子と只毎事ハ誠異事ハ節見  
 似たり然ども忠孝ハ與するハ貧富の間操節を見

翠色を會し後て榮とハ云く  
 諸木之彫は後て榮とハ云く



知者ハ惑ハ不仁者  
ハ憂不勇者ハ懼

與共ニ學可  
未與ニ道ニ適

可未與ニ道  
適可未  
與立可未  
權可未

唐棣之華偏  
其反及  
豈再も思不んや  
室是遠

未之も思ハ未  
也夫何の遠  
之有ん

郷黨第十

子曰知者不惑仁者不憂勇者不

懼能明者不暗者不惑仁者不憂勇者不

子曰可與共學未可與適道可與適

道未可與立可與立未可與權

唐棣之華偏其反而豈不爾思室是

遠而

也夫何遠之有

子曰未之思

郷黨第十

載て後世の法に備る者なり今此篇を讀て  
謹で其形容を想奉る誠は御側ニ在り

論語

四十一

玉藻集



孔子郷黨よ於て恂恂如言のつゝ能不着に似

其宗廟朝廷よ在て便便とて言唯謹し再

朝にして下大夫與言侃侃如

上大夫與言ハ言言如

君在セバ踧踖如與與如

君召て擯使セバ色勃如足躩如

與立所を揖と手と左右に衣の前後襜如

親拜一奉らるる如然も聖人あり心を寄て斯行なひをなすのハあり是

孔子於郷黨恂恂如也似不能言者

聖人ハ父母の御家よ在て郷黨よくの御交りも謙卑遜順を服要とて自己その大徳なるを隠し多ひ言さず恂恂とハ信實とて事あるの如く其在宗廟朝廷便便言唯謹

爾然も魚目の宗廟の法式及朝廷の政道よ與以て便便と明白よ仰めらるるを唯御自最もふりく謹とて容賅よありと

朝與下大夫言侃侃如也與上大夫

言言如也下大夫とハ郷大夫たる郷君の一族と下大夫と政務を論じ時ハ凡てありの直をつらハで仰せめ上大夫ハ言言として和悦を容て應

君在踧踖如也與與如也對をなすの事ハ容易ならず緩く正しなりと朝廷へ出て君御座ある時ハ恭敬表よあられとて踧踖とて事中庸の道よありて與々如と

君召使擯色勃如也足躩如也擯伏とりあ者あり擯ハ我主君の言を介告介他國の君の言を聞て擯やで傳役なり是兩君の會の時なり右客對の事よ與々時ハ勃如とハ顔色の正しと勃とて起居振舞の躩如滯とハ

揖所與立左右手衣前後襜如也







如<sup>レ</sup>階<sup>を</sup>没<sup>し</sup>  
て趨<sup>る</sup>に翼<sup>如<sup>ク</sup></sup>  
其位<sup>に</sup>復<sup>す</sup>も  
跋<sup>踏</sup>如<sup>ク</sup>

主<sup>を</sup>執<sup>ハ</sup>鞠<sup>躬</sup>如<sup>ク</sup>  
上<sup>と</sup>揖<sup>ス</sup>如<sup>ク</sup>  
下<sup>と</sup>授<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>  
如<sup>ク</sup>戰<sup>色</sup>  
足<sup>踏</sup>如<sup>ク</sup>  
有<sup>ガ</sup>如<sup>ク</sup>

享<sup>レ</sup>禮<sup>ハ</sup>容<sup>色</sup>有<sup>リ</sup>  
私<sup>ニ</sup>覲<sup>シ</sup>愉<sup>ム</sup>  
如<sup>ク</sup>

君<sup>子</sup>緝<sup>シ</sup>緇<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>  
飾<sup>ス</sup>一<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>

紅<sup>紫</sup>ハ以<sup>テ</sup>褻<sup>ス</sup>  
服<sup>ト</sup>為<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>  
暑<sup>小</sup>當<sup>テ</sup>袷<sup>の</sup>  
締<sup>裕</sup>必<sup>ズ</sup>表<sup>ス</sup>

論語

卷之三

玉藻集解

逞<sup>顔</sup>色<sup>怡</sup>怡<sup>如</sup>也<sup>没</sup>階<sup>趨</sup>翼<sup>如</sup>也<sup>復</sup>其<sup>位</sup>跋<sup>踏</sup>如<sup>也</sup>

如<sup>也</sup>御<sup>目</sup>通<sup>を</sup>過<sup>て</sup>階<sup>を</sup>一<sup>段</sup>下<sup>す</sup>堂<sup>下</sup>御<sup>視</sup>通<sup>あり</sup>故<sup>り</sup>と君<sup>の</sup>前<sup>の</sup>心<sup>地</sup>と君<sup>の</sup>堂<sup>上</sup>翼<sup>如</sup>て敬<sup>の</sup>過<sup>る</sup>夫<sup>より</sup>自<sup>身</sup>の座<sup>席</sup>へ返<sup>て</sup>ハるを

○執<sup>主</sup>鞠<sup>躬</sup>如<sup>也</sup>如<sup>不</sup>勝<sup>上</sup>如<sup>揖</sup>下<sup>如</sup>

授<sup>勃</sup>如<sup>戰</sup>色<sup>足</sup>踏<sup>踏</sup>如<sup>有</sup>循<sup>也</sup>

主<sup>ハ</sup>命<sup>を</sup>主<sup>と</sup>りて玉<sup>を</sup>諸<sup>侯</sup>に賜<sup>ふ</sup>て國<sup>を</sup>分<sup>封</sup>せらる<sup>時</sup>其<sup>印</sup>は天子<sup>より</sup>下<sup>り</sup>賜<sup>ふ</sup>所<sup>に</sup>然<sup>る</sup>は聘<sup>問</sup>と我<sup>主</sup>君<sup>より</sup>鄰<sup>國</sup>の君<sup>へ</sup>音<sup>信</sup>の使<sup>品</sup>を持<sup>参</sup>り事<sup>あり</sup>その時<sup>右</sup>の圭<sup>を</sup>我<sup>主</sup>君<sup>の</sup>命<sup>なる</sup>印<sup>を持</sup>行<sup>とな</sup>りそれ<sup>を</sup>添<sup>出</sup>す時<sup>受</sup>り渡<sup>す</sup>の如<sup>く</sup>君<sup>を</sup>重<sup>んず</sup>る事<sup>なり</sup>この故<sup>り</sup>躬<sup>を</sup>畏<sup>る</sup>

鞠<sup>テ</sup>重<sup>シ</sup>勝<sup>ズ</sup>如<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>扱<sup>上</sup>手<sup>を</sup>齊<sup>しく</sup>して抱<sup>き</sup>下<sup>へ</sup>下<sup>へ</sup>人<sup>に</sup>授<sup>くる</sup>心<sup>持</sup>たり色<sup>を</sup>勃<sup>て</sup>戰<sup>謹</sup>と歩<sup>行</sup>の大切<sup>き</sup>引<sup>足</sup>とつ者<sup>として</sup>地<sup>を</sup>高<sup>く</sup>と循<sup>と</sup>有<sup>ガ</sup>如<sup>ク</sup>

享<sup>レ</sup>禮<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>容<sup>色</sup>

私<sup>ニ</sup>覲<sup>シ</sup>愉<sup>ム</sup>如<sup>也</sup>

○君<sup>子</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>緝<sup>シ</sup>緇<sup>シ</sup>飾<sup>ス</sup>

紅<sup>紫</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>褻<sup>ス</sup>服<sup>也</sup>

當<sup>暑</sup>袷<sup>衫</sup>締<sup>裕</sup>必<sup>ズ</sup>表<sup>ス</sup>而<sup>出</sup>

論語

卷之三

玉藻集解







齊の時必らむ明衣有布をこと

齊の時必らむを食

必らむを坐遷を

食ハ精を厭ハ不

膾ハ細を厭ハ不

食の饘を餲

魚の饍を餲

肉敗ハ食セ不色

悪ハ食セ不臭惡

食ハ食セ不時

失ハ食セ不時

割不正ハ不ハ

食セ不其將酒を

得ハ食セ不

肉多ハ雖ハ食

の氣ハ勝使不惟

酒量無礼ハ及

不

沽酒市脯食セ

○齊必有明衣布 齊の時ハ別ハ明ハ服を

て膚ハ毛を去る衣類を著せしむハ浴を以て

らうら置なり但し此次ハ上らある処の必有明衣を

りハ衣を入て見バ齊必變食居必遷坐

○食不厭精膾不厭細 精ハ隨分ハいいたる

而肉敗不食色惡不食臭惡不食臭

飪不食不時不食 食物の饘を餲

敗ハ味を以て色を以て臭を以て

割不正不食不得其將酒不食

肉雖多不使勝食氣惟酒無量不及

亂 食事の肉飯ハ多ハ害あり

及沽酒市脯不食 沽ハ酒并

中華ハ大ハ酒を家内にて作る魚肉も同ヤ

不撤薑食 薑ハ臭氣穢惡

不多食 飲食ハ免ハ宜ハ數

論語二

論語二

論語二

論語二



公に祭て肉と宿  
不祭肉ハ三日と出  
さ三日と出さ  
ハ之を食せ不  
食一語不寝  
一言不

蔬食菜羹と雖  
瓜と祭る必  
らも齊如し

席正し不坐  
不

郷人の飲酒杖  
者出さス出  
郷人の儻朝服  
して阼階立

人を他邦同バ  
再拜して之と送ら  
康子茶を饋う  
拜して之と受曰  
丘未と達  
未敢嘗不

祭於公不宿肉祭肉不出三日  
公の祭を御助ありて其供養の道に  
出三日不食之矣  
の肉を拜領して歸る其

食不語寝不  
三日と出さハ肉の味しとて三日と出さ  
ゆへにこれを食しハ不とて

雖蔬食菜羹瓜祭必齊如也  
蔬ハ野菜の羹とて古ハ瓜祭は  
を除置て祭るを始め

席不正不坐  
席上正し不坐の時ハ坐し  
誠し君子の心なり

郷人飲酒杖者出斯出矣  
郷人飲酒杖者出ス出矣  
酒宴飲食

朝服而立於阼階  
朝服を著て立於阼階  
郷人儻

問人於他邦再拜而送之  
問人於他邦再拜而送之  
人を以て他邦

康子饋藥拜而受之曰丘未達不敢  
康子饋藥拜而受之曰丘未達不敢  
嘗

嘗  
聖人御不例の時魯の大夫康子より饋  
奉らるるその時聖人より受納て其







朋友之饋の車馬と雖も祭肉は非ざれば拜せず

寢て尸を不居し容せず

齊衰の者を見狎たいと雖も必ずしも變じざる者を見驚鼓者與を見驚顔と雖も心ならず

凶服の者之を式も負版の者も式も

成皿饌有らば必ず色と變じて作

迅雷風烈くは必ず變じ

車小升は必ず正しく立て綏と執

朋友之饋の車馬と雖も祭肉は非ざれば拜せず

朋友之饋雖車馬非祭肉不拜

朋友より進物を饋るる時ハたと車馬の如き重きものにとらば拜せども祭肉の供物ハ鬼神の與る事

○寢不尸居不容

○見齊衰者雖狎必變見冕者與瞽者雖執必以貌

○凶服者式之式負版者

成皿饌有らば必ず色と變じて作

迅雷風烈くは必ず變じ

車小升は必ず正しく立て綏と執

○升車必正立執綏

論語

玉藻集舍



車中内顧不疾言不親指

疾言ハハも親指

色して斯舉翔

集

曰まはく山梁の

雌雉時哉時

哉子路之

共と三とび嗅て

作

論語卷之三終

執て飛 車中不内顧不疾言不親指

車の中にて左右方をも顧みず疾言をなす疾

人をも惑へしむる

○色斯舉矣翔而後集

此段ハ他の文の續りて跡先文章の落字ありん此心ハそれ

鳥とつらふ者ハ人の氣色を見て飛舉をせらるる翔て色

相を見て又降りて

集との義なき

曰山梁雌雉時哉時哉子

路共之三嗅而作

雌雉ハ子路の感をもたせしめたるなり時哉と仰せあり

然るも子路の感をもたせしめたるなり時哉と仰せあり

これを執て飛作りたる元聖人の意あり然とつらふ

毎氣よつらふハ子路の感をもたせしめたるなり時哉と仰せあり

つらひて放りたるハ雉三とび嗅て飛作りたるなり



